編集後記

なんだかんだといいながら、実を言えば思いの外に『デュナミス』の完成は早かった。これはLaTeXによって組版したが、専らこれに当たってくれたのは、博士課程の越智君である。労を多としたい。この第1号は講座の全員が執筆したという点でも、画期的なものであるといえる。なお英文のチェックに当たって下さったのは、今年から助教授として当講座にお迎えしたレオン先生である。

執筆して下さった湯浅先生は、企画の段階で当講座の助手であったが、今年から姫路独協大学に講師として御栄転になった。代わって当講座の助手としてお迎えしたのが、李先生である。奇しくもここで新旧の助手が、共同して執筆に参加したことになる。

年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからずというが、人が変わってもこの雑誌が引き続がれ、益々発展する象徴ともなり、慶賀すべきことであるといえよう。今後の発展を祈るのみである。

「総合人間学部広報」*No. 18*　*1997*年*12*月。

近頃思うこと

34年の月日がこの洛北の一角で過ぎてしまった。最初のうちはこのキャンパスもかなり牧歌的であったが、学生が増え、職員が減って時間のみが加速しつつある。特に最近はコンピューター、特にネットワークに伴うさまざまな技術の革新はすざまじく、時間はますます早くなっていく。特にいわゆる情報に関係する人々の数が急増し、その勢いは当たるべくもないように見受けられる。人文科学も、社会科学も、皆情報の観点から総合化できるという主張も、少数の情報関係者の意見ではないようである。今や図書館は電子化し、限られた空間で多くの情報を蓄えることができ、それを殆ど瞬時に取り出すことができる。どこにいても

世界中の情報にアクセスでき、発信することも可能である。遠隔地の人々の会議が可能になり、在宅勤務も夢ではないなど、いいことづくめに見える。そのうちに大学の建物も要らなくなるかも知れない。さらに情報社会は僻地の人々の医療、介護、福祉などの社会的なサービスを充実させ、住む地域に左右されることなく、みな等しく恩恵を蒙ることができるという。

しかし、と昭和一桁は考える。もし図書館がすべて電子化され、コンピューターの端末によって図書を検索し、情報を取り出すことができたとしても、読書の楽しみ、書物に啓発されるものは、もっと人間的な営みではなかろうか。紙の手触りも、真新しいインキの匂いも、知識には重要な要素であるように思われる。近年コンコーダンスやデジタル・ブックなどの完備によって、この語はこの作品に何例、その形はこれこれというような検索が、瞬時に、遺漏のない形でえらるようになった。そのすばらしさを否定するものでは決してないが、昔、一枚一枚丁寧にカードを取り、それをめくるという作業の中で、気付かなかった問題が発見される、といった経験は誰しも持っていよう。コンピュータによる情報検索は、最初検索者が目指したものについては完璧な答えを出してくれるが、予期せぬ問題の発見につながるかどうかは、少なくとも文献学の分野では疑わしいように思える。

これも偏見かも知れぬが、科学技術はこれまで人間の利便性を飛躍的に高める原動力であり、花形であり続けた。科学技術を担いそれを追求することは一種の絶対的な善であった。その結果は当時予見すべくもなかったろうが、その帰結の一つが今日の地球の危機であることも確かであろう。一方情報の問題は文明そのものの質を変えつつある。これを再び絶対的な善として技術の面からのみ追求していけば、同じ轍を踏むことになるかも知れない。人文、社会、自然の諸科学が互いに独立性を尊重しながら共に進むことが、今もっとも必要なことであると思われる。人の心の問題も今までより、遥かに重大な意味を持つことであろう。一般教育の果たさねばならない役割は極めて大きい。

誤解を避けるためにつけ加えれば、私もコンピューター大好き人間の一人である。

人間・環境学研究科文化環境言語基礎論講座　やまぐち　いわお